

巻頭言
Greeting

×

山村 諭
Satoshi Yamamura
聖書宣教会 理事
(茅ヶ崎同盟教会 牧師)

Profile

聖書神学舎 45 期卒。2004 年より日本同盟基督教団北秋津キリスト教会で牧会。2013 年より教団総主事、2017 年より茅ヶ崎同盟教会牧師。現在、教団理事、お茶の水聖書学院教務主任、聖書宣教会理事。



「あなたこそ神であられます。」

第 2 サムエル 7 章 28 節 (新改訳第 3 版)

2020 年から監事として理事会に陪席していましたが、この度、長く理事を務められた佐藤源兄の退任に伴う後任人事で、私が推薦されました。まさに寝耳に水の出来事でしたが、これを受諾し、理事としてお仕える事となりました。

新理事として「巻頭言」のご依頼をいただき、何を書いたらよいかしばらく考えたのですが、ずっと気になっていたことを書くことにしました。それは宣教会ホームページのトップに掲載されている「ある研修生が卒業するときに残してくれた言葉」です。「単なる叙述ではなく、告白すべき神のことばを伝える使命を与えられたことを自覚させられる」とことばを残したのは、何を隠そう、私だったからです。

「叙述ではなく告白」ということば、確かに私が残した記憶があるのですが、記録が見当たりませんでした。パソコンに保存されている古いファイルを検索しても、その文書が見当たらないのです。記憶によれば、4 年生の最後の授業、津村俊夫先生の旧約研究で、サムエル記を読んでいる時、心に触れるものがあり、そこで「叙述ではなく告白」という認識を得たと記憶しています。

ふと気が付いて、神学生時代からアイデアを書き付けている小さなメモ帳の束をたどって見たら、記録が見つかりました。見出しには「じよ述ではなく告白!」と走り書きしてあり、「あなたこそ神であられます」「神に対する祈りの窓、全開!」

(DTT)とありました(DTTとは津村俊夫先生のこと)。日付は「2004 年 3 月 10 日、最終授業」。

メモには「PS(詩篇のこと)のすばらしさは形式のそれではなく内容。神によって語らしめられ、内容が成る」とあり、おそらく散文だけでも詩文的要素があるという議論をしていたのでしよう。「あなたこそ神であられます」とのみことばの解説を聞きながら、それが単なる解説ではなく、神に対するダビデ自身の信仰の告白に迫る取り組みであるということを受け取ったのです。講義で私自身が学んだのは、要するに言葉や形式の意味を叙述することを超えて、みことばが語る告白の内容を自らの告白として語り伝えることの重要性でした。

さて、記録を見つけれられてホッとしましたが、改めて問われます。果たして、自分はそのとき与えられた自覚に生き続けているだろうか。そして理事となって改めて思うのです。ある研修生が残した言葉がホームページのトップでいいのだろうか。これを機にトップページの言葉が変わったとしても気にしません(たぶん)。でも、教職養成機関としての聖書宣教会が、「みことばに生きる」奉仕者を育成することを大切にしながら続けたいと願いますし、私自身も理事としてそのためにお伝えしたいと願っています。

No.193 Topics

- p03 学びの窓
- p04 夏期研修講座
- p05 教会音楽夏期講習会
- p06-07 キャラバン報告

赤坂 泉

Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

聖書神学舎では、研修生の特権と責任をしばしば「学びと訓練」と表現します。召して下さった主の付託と送り出された教会の祈りに応えて、精一杯に研修生活を送っている一同のために、続けて禱援をお願いいたします。

これまで

年度初めの三ヶ月は、一年生にはまだまだ手探りの期間かも知れません。旧約通論、新約通論、教会史、そして何よりギリシア語等、圧倒的な情報量に向き合い、学びのペースを整えるのは容易ではありません。寮生活や教会奉仕における訓練も新鮮な経験でしょう。

二年目、三年目と、学びの成果を体感し、みことばを学ぶ喜びを味わい、一層の向上を願うようになっていく研修生の横顔を見るのは、教師たちの喜びです。

能力・体力の限界に直面したり、関係の破れを経験したりして、疲れ果て、気落ちする横顔も珍しくはありません。それも主が用意なさる幸いな訓練の機会だったりします。主に尋ね、みことばに静まり、仲間に祈られ、助けられて恵みを発見するに至る。大切な経験です。

夏の間も

夏には、普段とは違った学びと訓練の機会があります。キャンプなどの特別な奉仕、夏ならではの学びの機会、予期せぬ出会いや交わりに主の恵みを数えます。キャラバン伝道の報告は別頁をご覧ください。コロナ罹患のために予定の一部を変更せざるを得ませんでした。全体として祝された伝道実習の機会でした。主と受け

入れてくださった教会の皆様に感謝します。

学舎としても、夏期研修講座と教会音楽夏期講習会を開催できたことを感謝します。ただ、教会音楽夏期講習会ではコロナ感染が複数の方々に拡がってしまい、申し訳ないことでした。それでも、一つひとつの機会を主が用いて下さり、恵みを下さったと信じます。講座でも講習会でも、各地からの大勢の参加者と共にみことばを学び、交わり、祈る幸いを主に感謝しました。

教職員にも、それぞれに喜びと幸いが備えられているに違いありません。夏の終わりには、恵みの証しを分かち合えることでしょう。

そしてこれから

9月1日に前期授業を再開します。春以来の多くの恵みの上にさらに加えられる収穫に期待して学びと訓練に向かえるように、研修生たちのためにお祈りください。

教職員の必要も変わらずに多大です。前号から引用して同じことを書きます。「専任教師が起こされるように、次世代の教師陣が加えられるように、職員の面でもさらに充実するようどうぞお祈りください。」

「聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。」

2テモテ 3:16,17

「聖書翻訳と教理」

鞭木 由行
Yoshiyuki Muchiki
聖書神学舎 特任教師

聖書翻訳にとって避けがたい困難の一つは、教理との関係でしょう。翻訳をどこまで中立的（教理的に偏らずに）に訳しても結果的に、特定の教理をサポートすることになってしまう場合があります。最近気が付いた二つの事例を紹介しておきます。

最初の事例はガラテヤ書 6 章 16 節です。第三版では「この基準に従って進む人々、すなわち神のイスラエルの上に」となっていますが、2017 版では「この規準に従って進む人々の上に、そして神のイスラエルの上に」となりました。接続詞カイを「すなわち」から「そして」へと変更したのです。もっとも脚注には別訳「すなわち」も載せられています。この小さな接続詞の翻訳の背後には聖書全体をディスパenseーションの立場で理解するか、それとも非ディスパenseーションの立場で理解するかという教理上の問題があります。ディパenseーションの立場では、新約の教会が「イスラエル」と呼ばれている箇所は一つもないということですが、ここはその可能性を明示している箇所です。最近卒業生のひとりが卒論でこの問題に取り組み、ここは「すなわち」がふさわしいことをかなり説得的に論証してくれました。その卒論を指導しながら、私も改めて確認させられた次第です。

もう一つの事例はローマ書 5 章 12 節後半です。ここも第三版から変更されました。第三版では「こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。」となっていました。2017 版では「こうして、すべての人が罪を犯したので、死が

すべての人に広がったのと同様に——」と変更されました。この背後にある教理上の問題は有名なペラギウス論争です。ペラギウスは原罪を否定して、全ての人が死ぬのは、アダムの原因とは関係なく、すべての人が罪を犯したからであると考えました。2017 版が「こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がった」と訳したとき、結果的にペラギウスの説を支持するようになっていました。第三版は、そのような誤解が入り込まないように、慎重にかつ工夫して訳していました。パウロは「こうして死が全人類に広がったのと同様に」と書いてきて、そこで、さらに説明を加える必要を感じて結論の導入を後ろに引き延ばしたので。そのことを示すために、句読点「、」と棒線「——」を挿入しました。そうすることで「すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がった」という誤解を避けようとしたのです。このことは舟喜順一先生から直接伺ったことがあります。先生はペラギウスの立場を否定するためにそう訳したのではなく、文法的にそう訳すことがいかに正しいかを説明してくれました。もっとも注解者の中には、2017 版のように訳してもペラギウス主義を認めていることにはならないと主張する人もいます。しかし、訳を変更しなければならなかったのか、これも聖書翻訳が教理と微妙に絡み合う箇所です。なお教会とイスラエルの問題に関しては舟喜順一著『聖書の教える教会について』の「神のイスラエル」の項をご覧ください。先生がディスパenseーションの立場をとっていなかったことが分かります。

「原典は原点」の恵み

- 「学」の故郷にて -

松元 ハンナ

Hannah Matsumoto
若葉キリスト教会教師
北海道聖書学院講師

昨年に引き続き、今年も対面で開催することができました。今年は総勢 54 名が集まり、聖書からの学びとともに、普段はできない牧会者たちの交わりに励まされるひと時でした。

救済論がおろそかにされているのではないかと思わされる中で、「今、救済論を考える」が今回のテーマでした。教師たち 7 名の発表は、結果、四部構成となったように私は思っています。

第一部では、若井和生先生がルターとカルヴァンの義認論を確認してくださいました。第二部では、伊藤暢人先生による「ささげ物に手を置くことと宥め」、そして鞭木由行先生による「イザヤ書 53 章 10 節における代償のささげ物」から、旧約が語る贖罪論について学びました。第三部では赤坂泉先生が義認論において大切な「神の義」理解についてまとめた C.L.Irons の書物を紹介してください、私はパウロ書簡における「神の義」と「ピステイス(信仰 / 真実)」について語りました。N.T. ライトに対する応答の一部でした。第四部では田村将先生がヤコブ書を中心に「信仰と行い」について、横山昌英先生は 1 コリント書を中心に「義の転嫁」について語ってくださいました。

「救済論」と言っても、その一部しか扱うことができませんでした。救済論がおろそかにされようとする今日の動きの中で、聖書からそれに応答する試みも必要ですが、同時に聖書は「救い」について豊かに語っていることをも私たちは忘れてはならないと思われた次第です。

みことばの示す根拠はかくも確かで、信仰の故郷に帰った! という感動の 3 日間でした。

鞭木由行師の講義は、原語を通して、聖書テキストに近づくことをゆるされていることの素晴らしさを改めて実感させていただきました。私は主に 2 つの点がとても印象に残りました。

NPP 問題は、狭き門を広き門に変え、キリストの十字架以外に解決のない人間の罪の深刻さと真実に向き合うことを避ける不思議な福音だと私は感じていました。しかし、他者の神学の是非よりも、誤りない神のことばである聖書の自証を出発点とする原典を根拠に繰り出される論理を理解していく行程が自分を力強く励ましてくれました。ポストモダンの時代、次々と生まれる新しい神学の説得力に試される日々ですが、みことばを超える神学などありません。ただ神に聞くという諸先生方の「救済論」に関する緻密な原語研究や歴史神学や神学書紹介が聖書全体を通しての一つのメッセージとなって、聖書が示す罪の深刻さと、だからこそキリストによる十字架における贖い以外に救いの道がないことを改めて確信させていただきました。

昔、神学舎在学中意識させられていた神学的議論は、リベラルに対峙する福音主義でした。今、その境界線が壊れて「多様な? 聖書信仰」が乱立している福音派の交わりの中に置かれていると感じます。唯一の真理である「神のことば」に希望を置きながら、同時に私自身が浅薄な知識で自らの正しさを振りかざす者ではなく、真にみことばに聞き生きようとしているかを問われる時間でした。





教会音楽夏期講習会の報告

馬場 義実

Yoshimi Baba
聖書神学舎 講師

記録的な酷暑の中、対面では4年ぶりとなる教会音楽夏期講習会が7月下旬に聖書宣教会で行われ、30名の参加者がありました。

全体のテーマとして、「みことばと音楽-朗読とコラールによるヨハネ受難曲」とあり、そこから講義、講義と演習が行われました。横山師による講義では、黙示録5章におけるイエスの位置と役割から、救いと終末、聖書の価値観・歴史観、礼拝を学び、鞭木師からは「ヨハネにおける受難」と題して講義していただき、受難曲のテキストであるヨハネの福音書から一つ一つ丁寧に解説していただきました。赤坂泉師の「教理」の講義では「神を知ること」として、神論を学びました。講義と演習では赤坂恵美師からヨハネ受難曲にある各要素の発祥と変遷をたどって、それぞれの背後に息づく理念を概観し、受難曲の全体構造、聖書朗読とコラール、アリアについての解説をしていただき、矢吹師からは受難曲で用いられているコラールを基にしたバッハのコラール前奏曲の解説をしていただきました。そうして、とても幸いな閉会礼拝をささげました。

ただ、この講習会では受講者、関係者の複数の方々にコロナ感染が拡がってしまいました。ご不自由をお掛けしたことを申し訳なく思います。

今回の聖書と神学の学び、教会音楽の理念や実践の学びが、参加者の遣わされている教会で生かされ、更に用いられることを祈っています。

教会音楽夏期講習会に参加して

福留 優子

Yuko Fukudome
千歳烏山光の子聖書教会

待っていた対面での教会音楽夏期講習会でした。

参加されたみなさんとの会話や、夜の「学びと交わり」の時、また共に祈る中で、それぞれに求めているものは違いながらも、神様に導かれて集まってきたのだなと感じました。

3日間の講義と演習は、全て閉会礼拝のヨハネ受難曲につながっていました。例えば2回目の講義で、ヨハネの福音書におけるイエス様の受難のみことばを丁寧に見ていったことが、受難曲の中で群衆になって「十字架につける!」と悪意で叫び、ペテロの気持ちで「弱さ」を歌い、自分のこととして「主の十字架こそ救いなり」を歌うことにつながっていきました。これらの学びがないとしたら、私はきっと受難曲のたくさんの曲の数と楽譜の難しさの方に心を奪われてしまったと思います。

演習の資料の中に、「朗読される聖書の言葉に深く思いを沈め、それへの応答として、歌われる歌詞を噛み締めながら心から歌うことができるよう」と、ありました。そのように歌いたいと願いましたが、そのためには、聖書を学び、神を知ることが求めていくことが欠かせないことにも気づかれました。

この講習会は、先生方をはじめ、多くの奉仕者に支えられ、祈りによって守られたことを思います。ありがとうございました。

2 日本長老教会 辰口キリスト教会 (石川県)

7月13日(木)-17日(月) 狩野和信、川口美琴、後藤優香

私たち辰口チームはコロナ事情で三日遅れての出発となりましたが、そんな困難をも、主は私たちの信仰を成長させるために用いて、私たちの思いを超えた形で全てを整え、御自身の栄光をあらわしてくださいました。心から感謝いたします。

主な奉仕は、小学二年～五年生を対象とした一泊キャンプとキッズパーティー、主日のCS メッセージと小学生にも届く説教奉仕でした。メンバー其々で奉仕を分担し、準備を7月の上旬までには終え、直前のアクシデントにも対応できました。特に感謝だったことは、キャラバン中の一人ひとりとの関わりの中で、私たちがみことばによってキリストの愛に教えられ養われていくことが如何に大切であるかを、御霊によって気付かせていただいたことです。チーム皆が、「更に伝道が主に推し進められるためには」という思いへと導かれ、そのためにはキリストの愛に教えられ養われた者による、信仰に基づく忍耐深い伝道が必要なのだと学ばれました。



1 日本基督教団 活水の群 飯田知久町教会 (長野県)

7月11日(火)-7月18日(火) 中村瑞来、嘉数泉、ガウブ ナタナエル

今回は、飯田知久町教会が100周年記念礼拝と催し物(オープンチャーチ)を開催する時期に合わせて教会に伺いました。特にオープンチャーチはこれまでにないほどに準備と人手が必要な企画であると伺っておりましたので、教会の方々と共に、奉仕者としてお仕えできたことは本当に感謝でした。当日は、久しぶりに教会に来られた方や、町で声をかけた方が教会にお見えになり感動を覚えました。

また、みことばに仕える者として、あらゆる場面でみことばを取り次ぐ機会が与えられたことも感謝でした。集う方々が普段からみことばを大切にされているのがよく分かり、その方々と共に聖書から聴けたことは代えがたい喜びでした。

教会を励ましたいという一心で向かった私たちでしたが、むしろ私たちが大いに励まされました。この出会いを与えてくださった主に心から感謝をいたします。飯田の地に立つ教会と働き人たちを覚えてこれからも祈らせていただきます。

05 キャラバン伝道報告 Caravan Reports

コロナ感染症の“5 類移行”と共に、教会の働きが徐々に活発になる途上でのキャラバン伝道となりました。「教会に仕える者」(コロサイ 1：25-27) のテーマの下、明るい笑顔と豊かな交わりにつつまれて、3 チームを受け入れてくださった教会の皆様にご感謝申し上げます。今年もキャラバン伝道を祝してくださった主に感謝致します。

橘川 弘毅

Koki Kitsukawa

2023年度 キャラバン実行委員長

③ 日本福音キリスト教会連合 みなみ野キリスト教会 (東京都)

7月22日(土)-29日(土) 橘川弘毅、北崎慎也、本間里辺香

実家に帰ったかのような温かな雰囲気につつまれ、あっという間にみなみ野キリスト教会での奉仕の日々が過ぎていきました。

到着した日の子供デイキャンプ。午前と午後のゲームと聖書のお話の奉仕をさせて頂き、賛美、工作、パフェ作りで楽しい時が与えられました。翌日、子供と一緒に礼拝で証し、特別賛美、説教の奉仕を通し、共に主にある喜びに満たされ、歓迎食事会で豊かな交わりの内に、主にある家族という実感が与えられました。水曜日の聖書を読む会・祈祷会でみことばの奉仕を通して創造主の愛を分かち合いました。土曜日の教会主催サマーコンサートのチラシ配りや教会の草むしりの奉仕をさせて頂きました。

たこ焼きパーティーや、毎晩田辺先生ご家族や教会の皆様と一緒に頂いた食卓での楽しい会話、映画観賞会。田辺先生ご家族のお子様達と遊んだ思い出、牧師館のお風呂を使わせてくださったこと。家族のような豊かな時を与えてくださった主に感謝します。



○ 図書を紹介

鞭木 由行

Yoshiyuki Muchiki

聖書宣教会 研究図書主任・図書館長

ウォルター・C・カイザー Jr. 他著「聖書難問注解 旧約篇」(いのちのことば社)

この書物は「Hard Sayings」シリーズを編集した「旧約編」である。最初に序文があり、数人の著者たちが理解が困難な箇所について取り組むにあたっての基本的考え方を論じている。次に12項目にわたって緒論的問題を論じ、その後、創世記からマラキ書まで(オバデヤ書とゼパニヤ書を除く)各巻毎に、難解と思われる箇所を拾い上げて、著名な旧約学者であるウォルター・C・カイザーらが、その解決策を提示している。そもそも難解な箇所であるので、学者間に意見の相違があることは避けられないが、読んでいて面白い。例えば、ジェンダーの問題に揺れる現代に『女性が男性の助け手であるとはどういうことか』『女性はなぜ男性のあばら骨から造られたのか』などの問題設定がなされている。諸教会の図書に有益。

ついでに、聖書宣教会がこれまで夏期研修講座の成果として出版してきた書籍のうち、まだ神学舎で入手可能な書物を紹介しておきたい。「礼拝の聖書的理解を求めて」「賛美の聖書的理解を求めて」「聖書信仰とその諸問題」「祈りの諸相」など、これらがまだ在庫がありますので是非ご活用していただきたい。また今夏の「今救済論を考える」も何らか形で公にする方法を探っています。続いてこのような出版の働きでも神学舎が必要な貢献ができる様にお祈りください。

○ 聖書宣教会からのお知らせ Information

○ 「オープンデイ」のお知らせ

11月4日(土)

オープン・デイは、皆様を授業見学や礼拝出席にお迎えする学舎公開の日です。学舎の日常を垣間見ていただけるよい機会だと思います。神学校での学びを祈っておられる方々にとっても、主の導きを探る大切な機会となることでしょう。どの時間から参加していただいても結構です。申込は不要です。

(駐車スペースが足りませんので、直接車でのご来会をご遠慮ください。)

○ 「賛美礼拝」のお知らせ

11月25日(土) 14:30-

「主は私の羊飼ひ」

聖書：詩篇23篇

説教：伊藤 暢人

(聖書神学舎教師、永福南キリスト教会 牧師)

(駐車スペースが足りませんので、直接車でのご来会をご遠慮ください。)

	I限 8:20-9:05	II限 9:10-9:55	10:00- 10:30	III限 10:40-11:25	IV限 11:30-12:15	昼食 12:15-
1年	教会史 (若井和生)			旧約各書I (伊藤暢人)	賛美歌学 (赤坂恵美)	簡単な昼食を提供します。
2年	組織神学IV(キリスト論) (赤坂泉)	チャペル		旧約釈義I (鞭木由行)		時間の許す方は交わりにご参加ください。
3年	新約神学 (三浦謙)	説教者 (若井和生)		組織神学VII(終末論) (横山昌英)		当日の申込にて無料です。
4年						

(時間割は当日変更となる場合があります)

賛美礼拝は、賛美のうたをもって主をほめたたえ、主のみことばを聞き、主を礼拝するときです。来会してくださる皆様と一緒に礼拝をささげたいと思い、皆様をお誘いします。申込は不要です。オンラインの配信も予定しています。時期が近づいたら聖書宣教会のWEBサイトでご案内します。